

**1. はじめに** *建築専門の話ですが一般論として通用かと*

今建築界のみならず社会が抱えている問題では、専門分化・分業が個人の先鋭的な活力発揮を阻害しているのでは。システム改善はいうまでもないが、個人からの活力醸成が要。そのためには専門におけるコミュニケーションの充実を。そこで著者はコミュニケーション円滑化を図る手立てとして「交流」に着目。これは「混じり合う」と「語り合う」からなる。その効用を論理展開する。

**2. 現状の問題** *ステップしてください*

- (1) 市民と専門家とのコミュニケーション；住まいや街づくりには、専門家から市民に向けて一方通行的様相が散見。
- (2) 建築界がなすべきこと； 建築が社会の分業に徹している。大いに気にかかる。また建築の中で構造と意匠の連携が不十分。
- (3) 教育への介入； 専門家早期育成という青田買い。子ども教育への安易な介入、大人の枠組みで教育を押し付け。
- (4) 研究成果の社会への還元； 大学や学協会による研究成果を社会に還元するとして、市民向け講座実施や街での実践。良好。
- (5) 市民を含めた地域連携； 産学連携として地域の産業界が活性化。地域住民として例えば町内レベルで日常活動の役割も。
- (6) 実務者の心意気； 市民と直接接する実務者が研究者・教育者との連携を。実務者の孤立をさげ専門分化分業防止のため。
- (7) 教育(研究も)について好奇心の醸成； 物事の理詰めにも専門分化とともに目指すは総合化。そこには面白さも必要。その源は好奇心。専門枠内外自由思考が肝要。

**3. 展開**

**3.1 方針：** 効率至上による専門分化・分業。個人の顔がみえにくいことを問題とする。

**3.2 関心：** 思考の枠を広げるは当然、加えて少し広がりを持って。各自思考に「のりしろ」を設けて他の方と連携。

**3.3 方法の検討**

- (1) 活動の形式
  - (a) 混じり合い：お互い(分野)の垣根を低くすることによって、触発される機会が増え、各人の個性をもった討議が可能。
  - (b) 語り合い：討議と共に語り合い。お互いに時間をかけ遠慮せずに考えながらの討議ミーティングを行う。議論という対象を直に細分化して専門家の範疇となりがち。市民参加なら広がる。
- (2) 対象グループ：参加者には階層と地域の二面性あり。階層とは市民、専門家(研究者、教育者、実務者、行政人も)。地域の場合には、地域にて種々階層の方が入り混る構成。こうすると例えば学生と大人との混じりで社会性具備と志育成が可。

**3.4 具体的問題への対処**

- (1) 市民とのコミュニケーション：街づくりや住まいづくりで専門家と市民が向き合いの改善を。混じり合いはコミュニケーションで。
- (2) 職業人のアップ：実務者にもっと光を。社会の次元にて専門を考える機会と時間があまりなし。日常に精出すゆえに。
- (3) 若人育成：教育機関が頼りだが、やはり混じり合いを。
- (4) 日常性：高度技術社会に対応した知識や知恵の教育に加えて市民視点の育みを。専門家がその上で役割を演じるべき。

**4. 実践** *方法の説明が主です*

**4.1 交じり合い、混じりあい 学生対象**

- (1) ねらい：志育成として学生と大人の間で交じり触発あり。
- (2) 様相：北陸地区の建築系の集まりで目玉行事として「学生による語り合いのシボジボ」なる企画を03年から毎年実施。学生、専門家(職業人)、市民の交じり合い。毎回20-80人参加。テーマは街づくりや自主活動など多様。
- (3) 交じり合いの仕掛け：テーマ毎に島(机配置)を作り、プレゼン個人ではなくグループで。その後、自由討議は二方法で実施。A.各島でメンバー半分は他の島に討議に出かけ、残り半分は他の島のメンバーに対して討議を受けて立つ。一対一もあれば少数対多数の討議も。適宜攻守交替。立食パーティのり。B.島毎にテーマを設定。参加者が各島に適宜分散。着座で討議。何回か席替え。
- (4) 成果：レベルの差異関係無く気楽に議論が可。学生側では、社会性、仲間の存在、他分野の存在、自らの元気に気づく。職業人や市民の側には学生の元気に大いに気付き触発。

**4.2 集う** (1) ねらい：研究者、教育者、実務者の三者が風通しのよいコミュニケーション実施を目的。テーマを自ら用意し語り合う。

- (2) 様相：北陸地区の建築の集まりで02年度から毎年実施。「建築は生き残れるのか」等話題性のテーマで。毎年20人程参加。
- (3) 混じりあいの仕掛け：会場で結論を出すとか方向性を見出すとかでなく、参加者自身が家に帰って自分の中で種々思考して各自で方向性を見出し、次回にそれらを持ち寄るとする。
- (4) 成果：仲間づくりも効果大。何よりも主張することを楽しめる。十人十色のアプローチで幅の広がった議論が可。

**4.3 地域で混じり合う**

- (1) ねらい：地域において、いわば地域住民に顔のみえる交じり合いが専門家により行われたこともあった。今もあり。
- (2) 様相：一般的には建築集まりは大学中心の研究教育一環としての活動。富山では長きにわたり建築学科なし。多種多様な方々が結集して活動。それが功を奏す。(06年度に富山大学に建築コースが設立されるまで)他の地域には見られず。
- (3) 混じりあいの仕掛け：建築の集まりに参加する会員が地域に居住ではないか。当然、地域住民との交流。
- (4) 成果：地域での縦横の初ワークにより活動成果がすみやかに拡散。市民にとっては建築集まりが少なからず身近な存在。

**4.4 市民として混じり合う(専門家)**

- (1) ねらい：大学人も含め専門家は一市民として(専門に関して)参画し学び楽しみあう。サークル的企画で市民と混じりあう。
- (2) 様相：富山では90年代後半から続いている県民レッグ自遊塾がある。塾では趣旨に賛同する方々が自分の色(専門)を出して講座を主宰し、塾生とともに年十数回の講義を開催。対象は子供や市民。講座は造形教室、子供教室、などあり。
- (3) 成果：自ら参加して楽しむので、市民の輪のなかから活力アップ、市民にとって大いに満足。

**5. おわりに：** (社会の)システムをつくりかえるのは人であり、その意味でも交流を軸にした人づくりが要であると考え。混じり合いと語り合いにより(1)専門分化に対する総合化の具体的な方策は交流から、(2)交流の実践で大いに発展が期待、と結ぶ。